

音訳ボランティア 草笛の会

「音訳」とは、目が見えない、見えにくい方のために書籍や新聞などの内容を、音声にして伝えることです。津市河芸町で活動する「草笛の会」では、高齢になり本が読みづらくなった方に向けて「もう一度名作を聴き、感動してもらおう時間を」という思いで、日本文学の名作の音訳CDを制作し貸し出しを行っています。

音訳ボランティア「草笛の会」では、これまでに川端 康成や夏目 漱石、向田 邦子などの日本文学・随筆・小説200作品以上を音訳してきました。今回は、代表の西川 純代さんを中心に4名の会員にお話を伺いました。

——音訳ボランティアの活動のはじまりについて教えてください。

西川：はじまりは平成5（1993）年です。創設メンバーが「最近目が悪くなつて新聞が読みづらい」という家族の声を聞いたことがきっかけです。「目の不自由な方にも自分の住む町の情報を伝えたい」と活動をはじめ、当初は河芸町の広報紙をテープに録音し、登録者に届ける活動をしていました。河芸町と津市が合併した

ことで、その役割を終え、以降は「自分たちが本を読んで感動した想いをより多くの方に届けたい」と、名作を音訳し、そのテープやCDを「河芸図書館」「河芸ほほえみセンター」で貸し出しています。松岡：現在の会員は50〜80代の11名です。活動をはじめた背景はさまざまですが、本が好きで自分のできることで地域に役立ちたいという想いは共通しています。

——普段はどのような活動をされていますか。

西川：主な活動は勉強会と音訳作業の2つがあります。勉強会では月1回、専門性を持つ講師から音訳技術を学びます。新聞記事や小説の一場面などをテキストにしながら、内容を正確に伝えるための読み方を学んでいます。普段の音訳作業は、

うことをもどかしく感じています。

——今後の活動について、想いなどを聞かせください。

西川：最近ではパソコンとソフトがあれば自宅でも録音ができる時代ですが、録音室で一人になれる時間や、勉強会でのメンバーと交流する時間など「家庭や職場以外の場所」で過ごす時間が生活の刺激になり、音訳を通じて誰かの役に立てることが生きがいにもつながっていると感じます。活動を通じて会員の皆さんにとっての「居場所」「生きがい」をつくることも大切にしていきたいです。

奥山：今後の展開としては、本のジャンルを増やすとともに以前テープに録音した

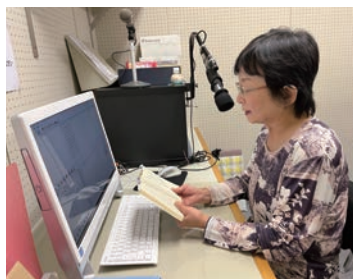
決められた時間ではなく、録音室を使用する時間割を決め、個別で進めています。

——1冊の本を音訳するまでには、どれくらいの時間がかかるのですか。

西川：1冊の本を吹き込むまでには半年から1年かかることもあります。一作品はすべて一人で音訳します。まずは自分が読みたい作品を選び、最低5回は「下読み」します。このとき、分からない言葉の意味や正確な発音、アクセントを調べます。そして「録音を終えたら「校正」をします。自分で聴き直すだけでなく、他の会員に

作品をCDに録音し直すことを進めています。また「家事をしながら名作が楽しめる」といった音訳作品ならではの魅力も合わせて発信することで、若い人などより多くの人に広めていきたいです。

——音訳を通して作品に向き合う時間は会員の皆さんにとっても充実した時間になっているようですね。たくさんの方に利用されるとともに、これからの時代を担う仲間（担い手）が増えることも期待しています。インタビュー……中川 絵美子



録音室での作業風景



「河芸ほほえみセンター」の棚



手作りの音訳CD



左から、松岡 雅子さん、吉田 桂子さん、西川 純代さん、奥山 伊久子さん。



会長 西川 純代(すみよ)さん

お問い合わせ

「草笛の会」
TEL 059-245-1471
(会長 西川 純代さん)



勉強会のようす※